

国指定史跡 骨寺村莊園遺跡

平成22年度調査概要



平成 23 年 3 月
一関市教育委員会

中尊寺と骨寺村

はじめに

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。また鎌倉時代には中尊寺の荘園であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』によって証明されており、その歴史的貴重性から、平成17年に国史跡「骨寺村荘園遺跡」に指定され、平成18年には稀有な中世以来の景観の継続性により「一関本寺の農村景観」として国の重要文化的景観に選定されています。

当市では、この骨寺村荘園遺跡の世界文化遺産登録を目指しており、歴史理解の深化を図るべく調査研究に取り組んでいます。これまでは中世農村景観や土地利用状況、農地の整備等に関連した情報収集に意を注ぎ、特に平地を中心に調査研究に取り組んでまいりました。今年度は、絵図に描かれる信仰に係る遺構の重要性も鑑み、地上に残存している「慈恵塚」について、現状確認のための地表面精査と電気探査を実施しています。また村の名前の由来となったと考えられる「骨寺堂跡」の確認調査も、昨年を引き続き、実施しています。

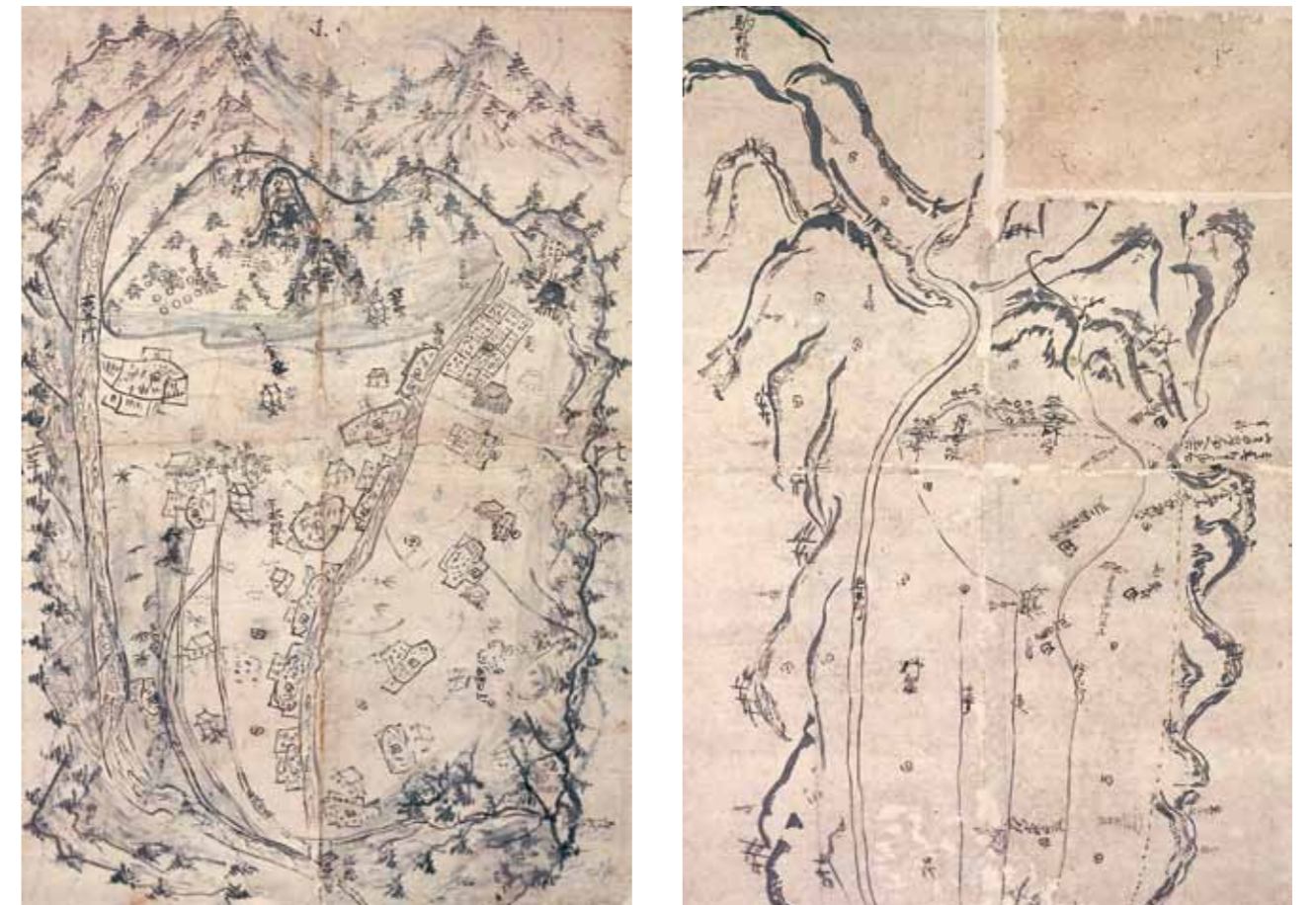
本書ではこれらの調査成果を広く公開するとともに、当市の文化財への興味と関心が高まることを期待しています。最後になりますが、調査に際しては地権者をはじめ多くの方々のご協力を頂きました。衷心より感謝を申し上げます。

一関市教育委員会
教育長 藤堂隆則

例言

1. 本書は一関市教育委員会 生涯学習文化課が実施した骨寺村荘園遺跡に係る調査の概要報告書です
2. 本書は一関市教育委員会 生涯学習文化課が執筆・編集しました
3. 出土した遺物は一関市教育委員会が保管しています

【表紙】 写真は、一関市巖美町本寺地区に所在する骨寺村荘園遺跡の航空写真。
磐井川によってつくられた谷あいの、狭小な平野部とそれを囲む山々が骨寺村荘園遺跡です。



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』中尊寺蔵

平安時代末、自在房蓮光^{じざいぼうれんこう}という僧侶は藤原清衡^{ふじわらのきよひら}の命令により紺紙金銀字一切経^{こんし きんぎんじ いっさいきょう}を完成させました。その功績により、中尊寺経蔵^{ちゆうそんじやうぞう}の別当^{べつとう}（責任者）に命じられ、蓮光は自分の領地であった“骨寺村”を中尊寺経蔵^{ちゆうそんじやうぞう}に寄進^{きしん}（寄付）しました。こうして中尊寺領としての骨寺村は出発します。

中尊寺には、鎌倉時代後期の『陸奥国骨寺村絵図』^{むつのくにほねでらむら え ず}2枚が残されています。この絵図は当時の本寺地区を描いたもので、中世の農村景観を伝える大変貴重な史料です。

絵図は、鎌倉時代後期に中尊寺と、奥州藤原氏の滅亡後にこの地を支配した葛西氏との所領争いにおける裁判の証拠書類と考えられています。左側の絵図は農家や田圃、川や道路が詳らかに描かれており“詳細図”と呼ばれています。それに対し右側の絵図は“簡略図”と呼ばれ、村を取り巻く山々がダイナミックに描かれています。山々の尾根線を挟み「寺領」と「郡方」と記されており、山々に囲まれた部分が“骨寺村”であったことが分かります。

また鎌倉幕府が編さんした歴史書『吾妻鏡』^{あづまかみ}にも「骨寺」が登場します。源氏と藤原氏との合戦であった奥州合戦が終った後、中尊寺僧心蓮が頼朝^{しんれん}に対し寺の領地を安堵^{あんど}（保障）してくださいとお願いに行きました。すると頼朝はその場で骨寺（東は釜懸^{かぎかけ}、西は山王窟^{さんのおうくわ}、南は磐井川^{いわいかわ}、北は峯山堂の馬坂^{みたけどう まさか}）を寺領として認めました。この際に示された骨寺村の四至（村境）が現在も地名や遺跡として残されています。

じえづか
慈恵塚とドクロ伝説



精査後の慈恵塚

慈恵塚には慈恵大師のドクロが埋められていると伝承されています。伝承の基になったのは鎌倉時代につくられた仏教説話集『撰集抄』の記述です。その内容は、「村の娘が法華経を学びたいが教えてくれる人がいないと嘆いていた。すると天井裏から声が聞こえてきて、お経を教えてくれた。八日間ですべて習い終ったが、娘が怪しく思って天井裏を覗いてみると、そこには舌の生えたドクロがあり、「私は延暦寺の昔の僧、慈恵大師である。急いで逆柴山へ送れ。」と話した。娘は言われた通りにドクロを逆柴山に納めて、自らも尼になった」というものです。本年度調査では、この伝承がどのように伝わってきたか、江戸時代の地誌類を元に検討を行っています。

この地方では、近世後期の『安永風土記』に代表される地誌類が盛んに作成されています。それら地誌類を作成された年代順に検証を行っていくと、慈恵塚の記述が登場するのは明和九年（1772）に作成された『邦内風土記』以降であることが判明しました。それ以前の古文書類にはこの内容は記されていません。江戸時代後期に地誌類を作成するための資料調査が行われ、『撰集抄』の記述と骨寺村にあった“古塚”が結びつけられたものと考えられます。

この調査結果は、塚の傍らにある「慈恵大師塚碑」の碑文とも一致します。この石碑は中尊寺の僧覚天によって安永五年（1776）に建てられたもので、覚天が『撰集抄』の記述を読み、骨寺村の古塚を発見したことが記されています。

この調査結果から、江戸時代後期に地誌類のための史料調査によって、『撰集抄』と骨寺村の古塚が結びつけられ、それが今日まで伝承されてきたものと想定されます。



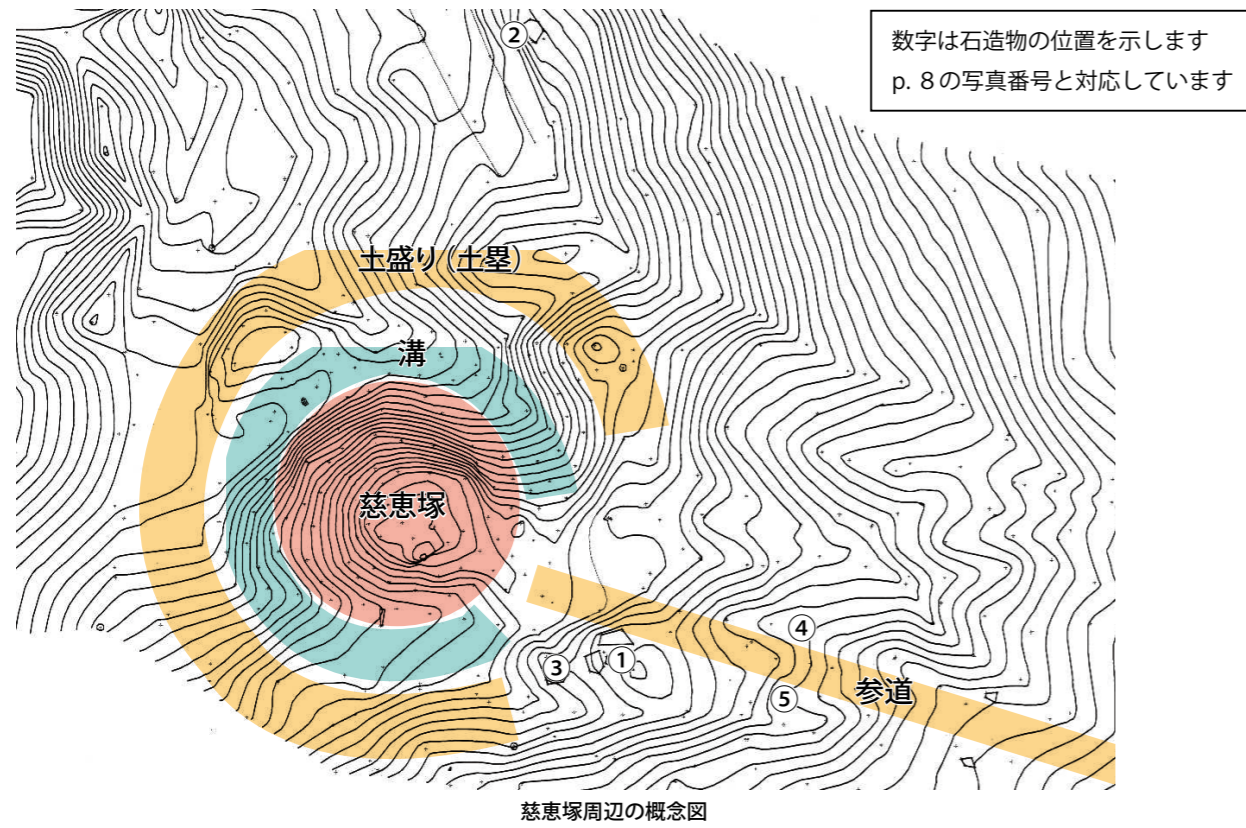
精査後の慈恵塚全景写真



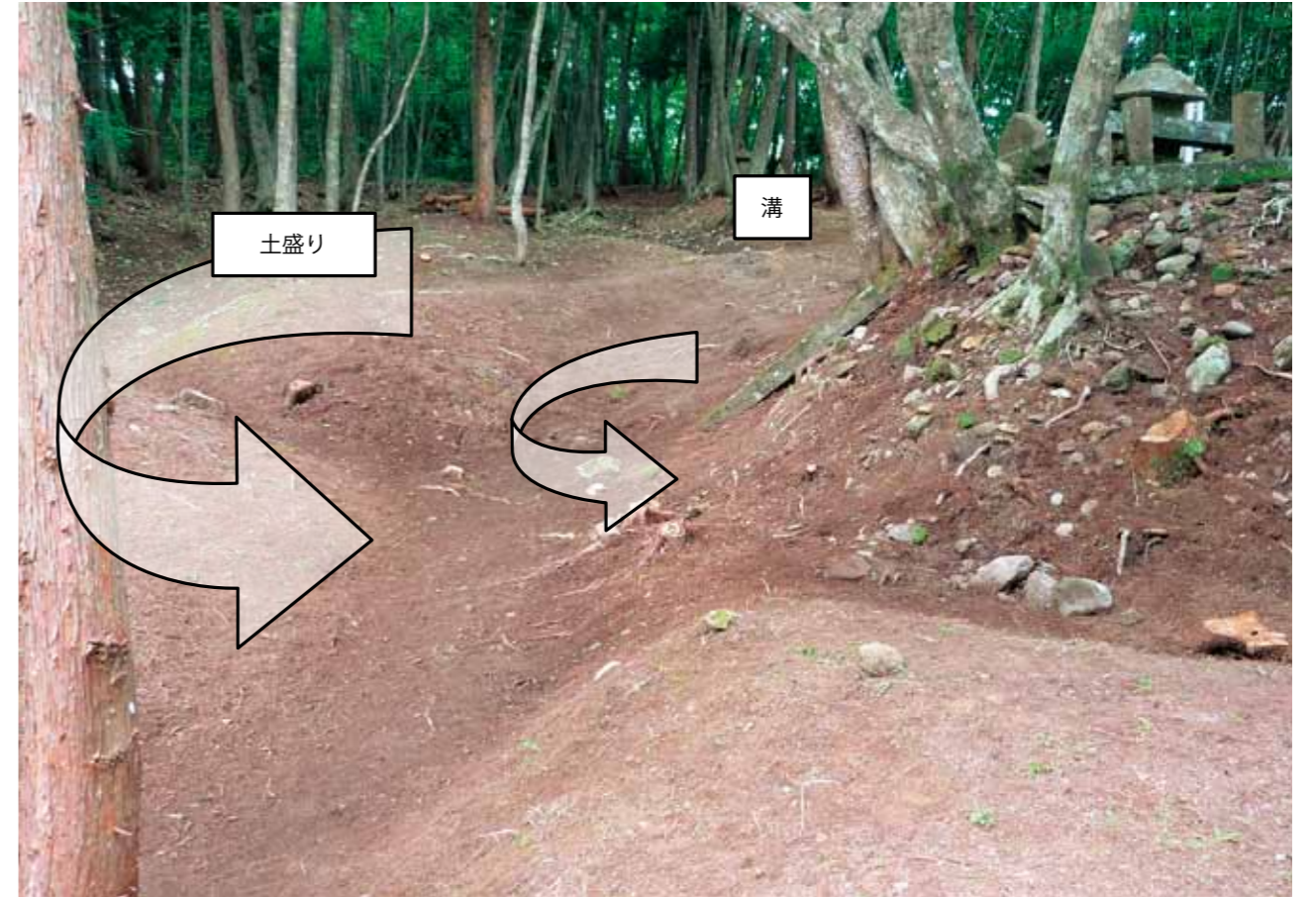
北から望む慈恵塚

慈恵塚の表面精査と石材移動

本年度調査では塚周囲の精査と石材移動を行っています。精査した結果、塚は東西約10m、南北約8m、最大高約2.2mと大規模であることが明らかになりました。また塚の周囲には溝と高さ約60cmの土盛りが巡ることも判明しています。調査では崩落した石材の移動を行っています。



石材移動後の慈恵塚



塚周囲の溝と土盛り (土塁)



石材移動後の塚頂部

慈恵塚周辺の石造物

塚周辺にはいくつかの石造物があります。その中には紀年銘（制作年）が刻まれているものもあり、いずれも江戸時代後期に建てられたことが分かります。慈恵大師伝承と古塚が結び付いた結果、慈恵大師を顕彰するために、塚周囲に石碑が建てられたものと考えられます。



1. 『慈恵大師塚碑』安永五年(1776)



2. 『若木大権現』安政五年(1858)



3. 『□□恵大師□』天明元年(1781)



4. 参道北側燈籠 安政三年(1856)



5. 参道南側燈籠 安政三年(1856)

慈恵塚から出土した遺物

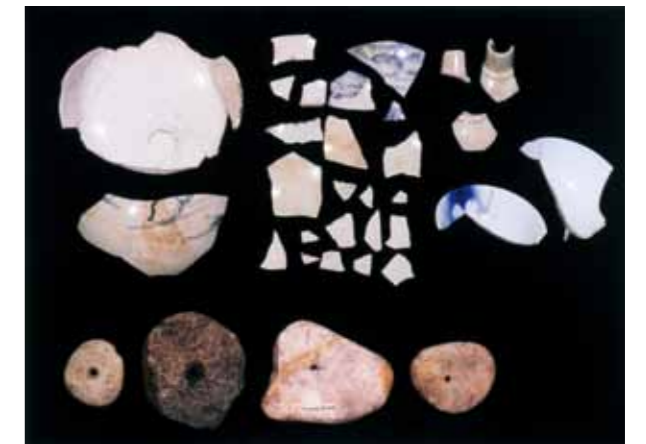
慈恵塚の表面精査と崩落した石材を移動した結果、江戸時代後期を中心とした遺物が出土しました。塚の頂部からは、江戸時代後期の金属製香炉と燈明具、火箸がセットで出土し、当時の信仰の様子が窺えます。周囲からは陶磁器や銭が出土しています。これらの出土遺物から、近世後期に塚の大規模な整備があったことが想定されます。

香炉は金銅製と考えられ、線香立てとして利用されていたものと思われます。燈明具は18世紀後半から19世紀前半頃に東海地方の瀬戸窯で制作されたものと考えられます。火箸の持ち手には格子状の装飾がみられました。

表面精査で出土した陶磁器類はいずれも江戸時代後期から近代のものと考えられ、慈恵大師伝承と塚が結び付いた結果、人々の信仰を集めたものと考えられます。“穴あき石”も信仰に係る遺物と考えられ、県内では、西和賀町薬師神社で現在も奉納が行われています。



遺物出土状況 香炉と燈明具、火箸がセットで出土しました



遺物写真 上段は近世近代の陶磁器
下段は信仰に係る「穴あき石」



塚頂部から出土した香炉と燈明具、火箸

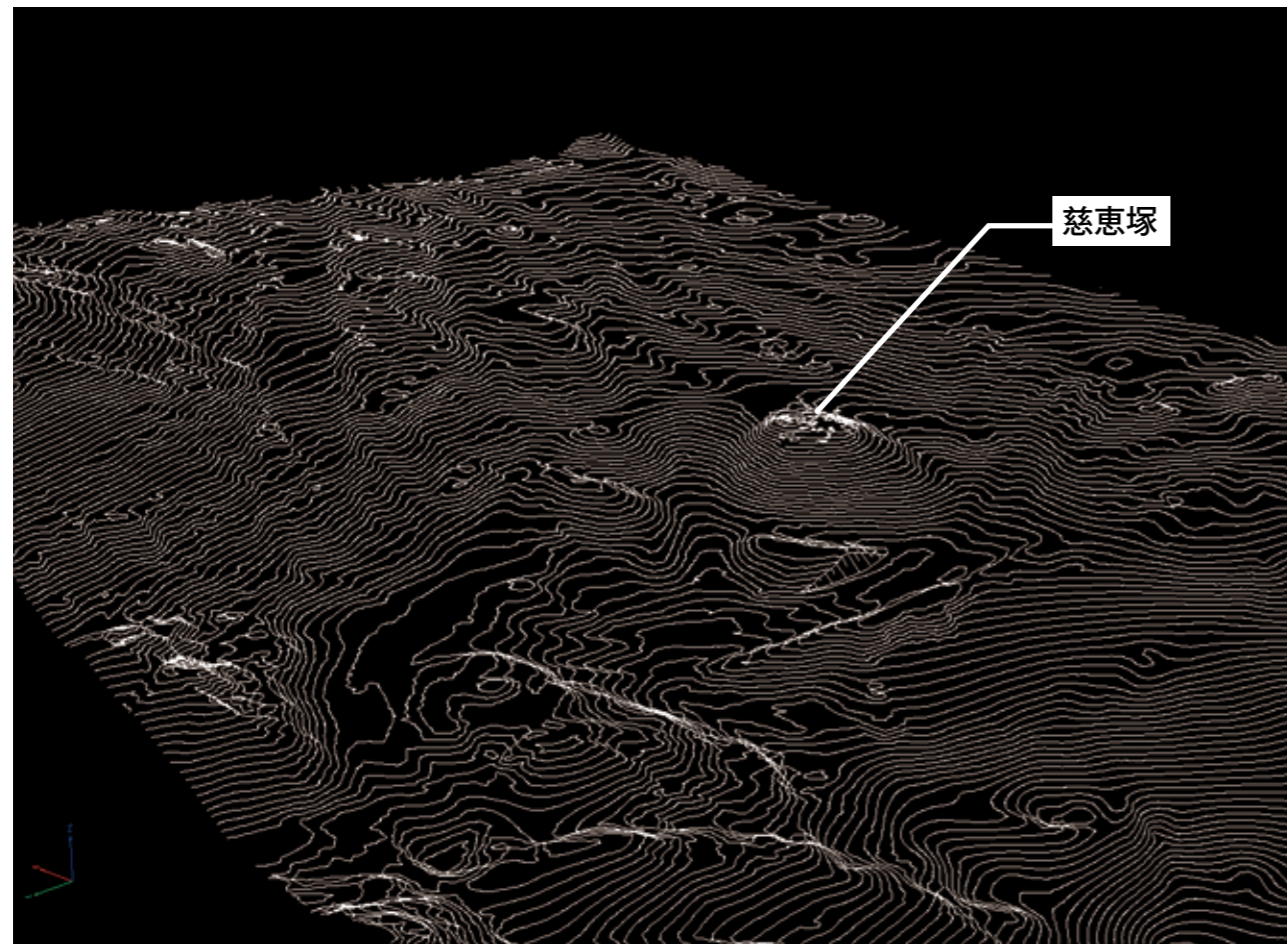
地形測量と電気探査

詳細な地形図面の記録をするため、レーザー測量を実施しています。これにより塚周辺の三次元データを記録することができ、天候や天災などの経年による変化を把握することができます。史跡の維持管理や将来的には遺跡整備の基礎データとして活用することも可能です。また同様の手法で、周囲の石造物の測量も試験的に実施しています。風化していく石造物に対して、詳細な記録を残すことも、文化財の保護という観点では重要と考えています。

測量を行った結果、塚の所在する場所は、山稜部の斜面ではなく、山あいの斜面地にある狭い平場を利用していることが分かりました。この平場は人工的に造成された可能性もあり、今後の調査が必要です。

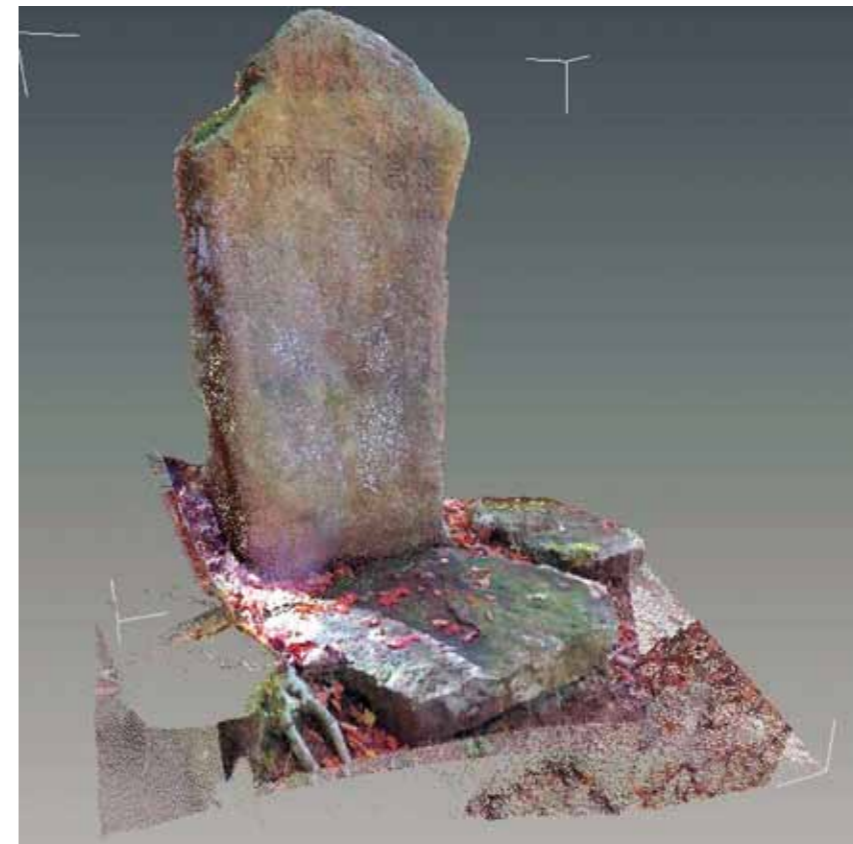
今年度調査では塚の内部状況を探るため、電気探査による調査を実施しています。電気探査は地中に電気を流し、その抵抗値を計ることによって、地中がどのような状況になっているかを測定する方法です。

その結果、塚の表面は葺き石で覆われ、塚本体は土で構築されていることが判明しました。また地上では確認できない、すでに埋没している溝も周囲をとりまいている状況が推測されました。

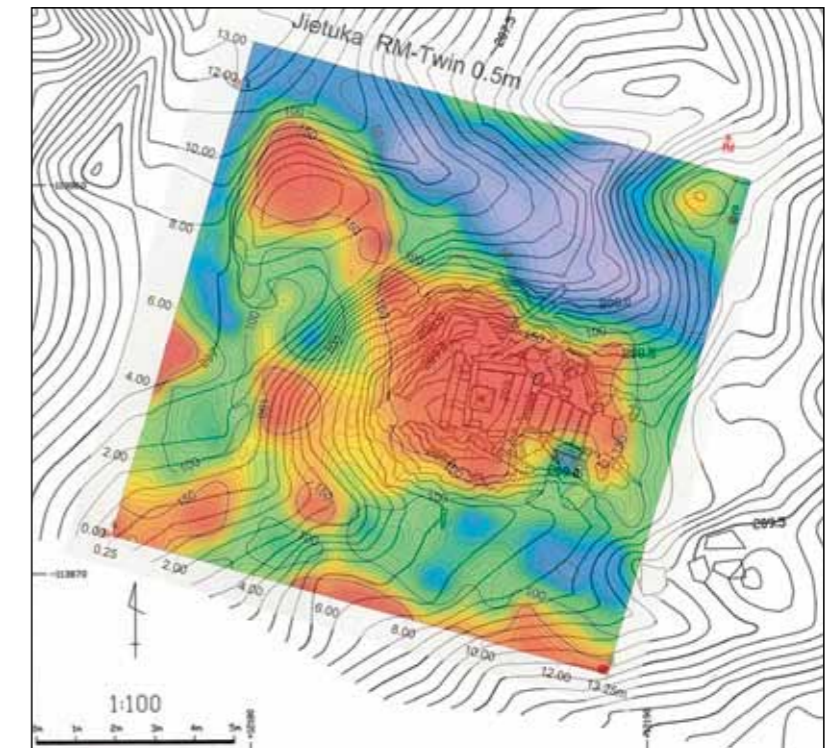


慈恵塚周辺の三次元測量図

パソコン上では様々な角度から観察することが可能です



「慈恵大師塚碑」の三次元測量データ（p.8写真1と同一の石碑です）



電気探査成果図と地形図の合成図（深度50cm未満）

赤色の部分が電気抵抗値の高い部分で、青色が抵抗値の低い部分です。抵抗値の高い部分は河原石が散布している範囲と合致します。これ以上の深度では抵抗値が低いので、塚の表面のみに石が葺かれていることが想定できます。塚周囲の抵抗値の低い部分は、溝と考えられます。これにより目視で確認できない部分にも溝が巡っていたことが判明しました。

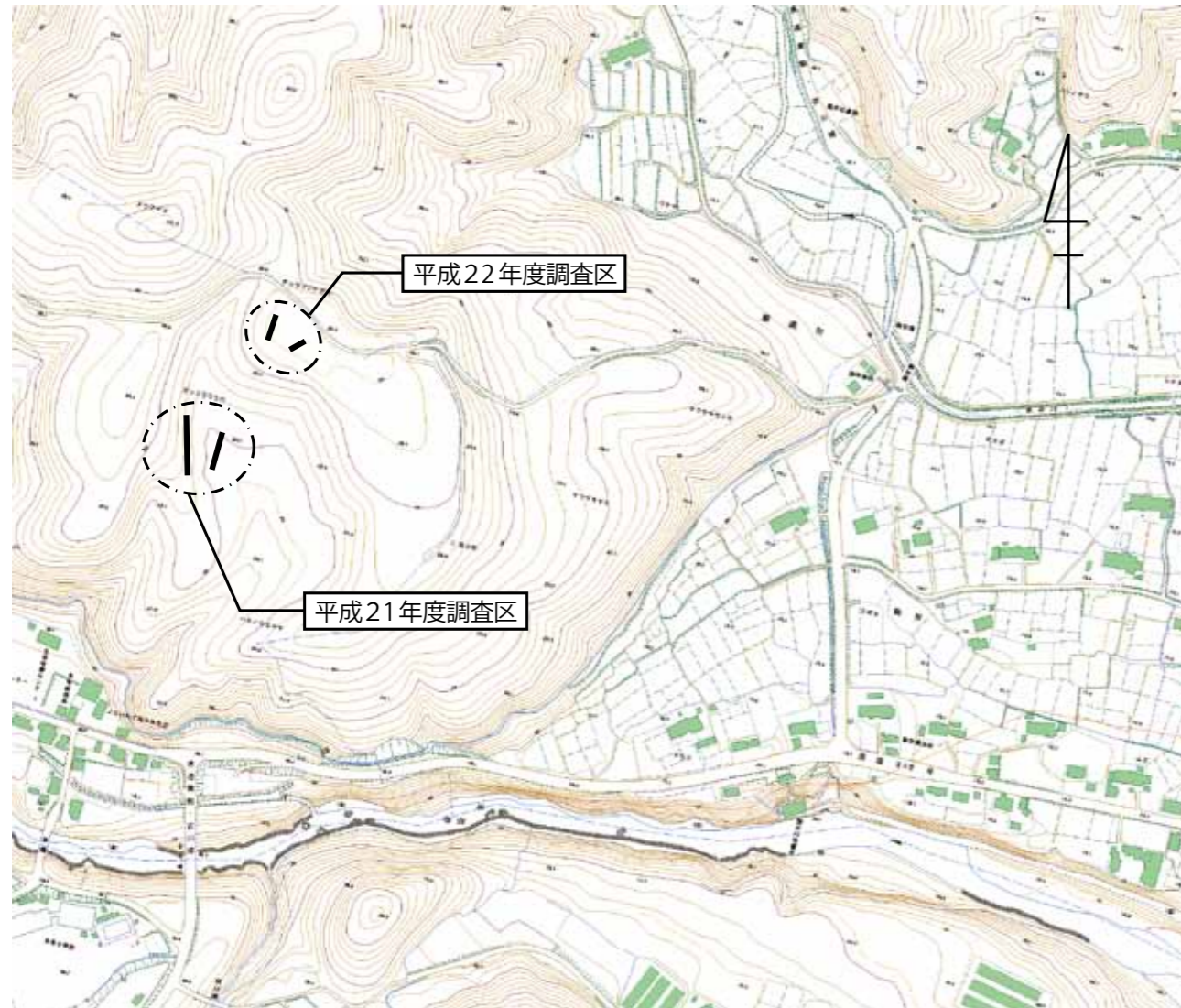
へいせんの いせき
平泉野遺跡の調査概要
(巖美町字若井原 194-1 番地点)

昨年度に引き続き、^{ほねでらどうあと}骨寺堂跡の発見への手掛かりを得るために、骨寺村荘園遺跡の西側丘陵部の内容確認調査を行いました。

昨年度調査では、平安時代中期頃の遺物が出土し、荘園時代以前の土地利用の可能性が示唆されました。今年度は、その痕跡の範囲を確認するため、昨年度調査区の上段に調査区を設定しました。しかし今年度は平安時代の遺物は出土せず、昨年度調査に対応する地層も確認できませんでした。

東側調査区では、縄文時代の焚き火跡2カ所が発見され、小片ながら縄文土器と石器の剥片が出土しました。昨年度調査では縄文時代の落とし穴が発見されていることから、この焚き火跡も狩猟に関係するものと考えられ、付近一帯が狩り場であったことが予想されます。西調査区では地表面観察で溝状の地形が確認されたため、調査区を設定しましたが、出土遺物などはなく、年代等は未詳です。

これらのことにより、今年度調査区付近では縄文時代より後の土地利用はなされていないかと推測され、骨寺堂跡の存在の可能性は低いものと考えられます。



平泉野遺跡調査位置図



東調査区全景写真



焚き火跡 (左写真手前)



平成 21 年度調査の出土遺物 左：須恵器 右：土師器



西調査区全景写真

地表面調査で溝状の地形が確認されましたが、時期等は判明しませんでした。

調査成果のまとめ

今年度の調査では、文献史料の整理と塚周辺の精査、三次元測量と電気探査を実施しました。

文献史料の整理から、塚と慈恵大師伝承が結び付いたのは江戸時代後期であることが想定されました。周辺の石造物は安永五年（1776）から安政三年（1856）に建てられたもので、その多くが慈恵大師を顕彰するものであることが判明しました。また出土遺物からも、同時期に石製玉垣や階段など、塚の整備がなされたことが推測されます。これらのことから、江戸時代の風土記編さん過程において、本寺地区にあった古塚は慈恵大師の髑髏が埋められた場所と比定されたと考えられます。その結果、慈恵大師を顕彰するために、塚及び周辺の整備がなされたものと推測されます。

また調査では、塚周辺の詳細な記録類の作成と電気探査を実施しています。記録類は三次元測量を実施し、遺跡の経年変化の観察、将来的には保存整備にも活用することができます。電気探査の結果からは、塚は土で構築されており、表面に葺き石が施されたことが推定されました。

周辺の精査の結果、遺跡の保存状況は極めてよいことが明らかになりました。この良好な状態を後世に伝えるべく、保存や整備を念頭に継続的な調査の必要があると考えられます。

平泉野遺跡の調査では、残念ながら骨寺堂跡の痕跡を発見するには至らず、昨年確認した平安時代の地層も検出できませんでした。東西の二つの調査区で同様の結果であったため、この台地上に骨寺堂跡の痕跡を求めるのは困難であることが予想されます。次年度以降、調査範囲の再検討も視野に入れることが必要となります。



冬の骨寺村 要害橋付近から若神子社と慈恵塚を望む

～調査の風景～



調査前の慈恵塚



慈恵塚周辺の表面精査作業風景



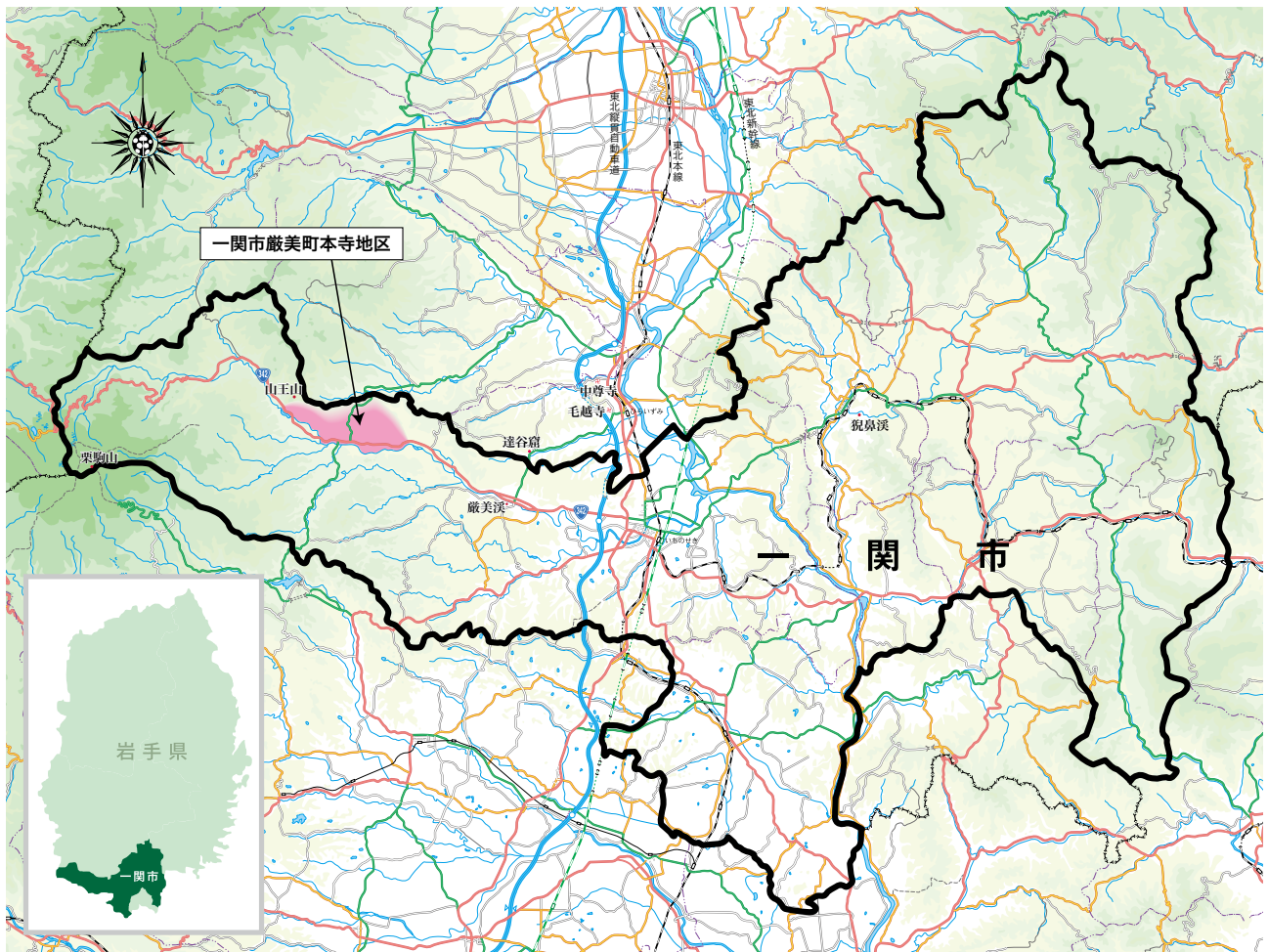
電気探査作業風景



移動した石材の仮保管状況



骨寺村荘園遺跡指定範囲図



骨寺村莊園遺跡位置図

国指定史跡 骨寺村莊園遺跡
— 平成 22 年度調査概要 —

【編集・発行】 一関市教育委員会 生涯学習文化課
岩手県一関市竹山町 7-2

【印刷】 川嶋印刷株式会社
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原 21
平成 23 年 3 月 31 日